

第十一回 しませ 島清ジュニア文芸賞 受賞作品

『優秀賞』

【中学生小説の部】

タイムマシンの夏

笠間中学校二年 しんたく 新宅 ひなつ 妃夏

「あつい」

息も詰まるような熱気とセミの鳴き声に囲まれながら、私は思わずそ
う呟つぶやいた。

8月半ばを過ぎた、お昼ごろ。

私は部活を終えての帰り道を、とぼとぼとだらしなく歩いていった。

今日の部活は午前中だけの活動だったから、こうやって、おてんとう
さまが頭の真上あたりでべかっと光っている暑さ大爆発ッ！の時間帯に
帰宅しなければならぬ。……まあ、午後の部活の場合は行きがこのく
らいの時間だから、あとはクーラーのきいた部屋でゴロゴロするだけ、
の今の方がマシなのかもしれないけれど。どっちにしろ、暑いのに変わ
りなかった。できることなら夏休み中ずっと家で寝ていたたい。

「あら、千波ちゃん。今日も暑いわねえ」

家まであと少し、というところで、ちょうど畑仕事をしていた近所のお

ばさんに声をかけられて、私は足を止めた。

「あ、こんにちは」

「学校だったの？」

おばさんは制服姿の私を見て、訊いた。

「部活だったんで……」

「学生さんは大変ね。はい、その畑でとれたスイカ。持って行って」
小降りのスイカを手渡されて、私はつくり笑いをした。実をいうと、
私はこのおばさんがちよつと苦手だ。こうやってものをよくくれること
はともありがたいんだけど、そのあとの話がとにかく長い。

「あの、急いでるんで……。失礼します」

一刻も早くこの暑さとおばさんの世間話から逃れたくて、私は特に用が
あるわけでもないのにそう言った。

「そうなの？友達と約束でもしたのね」

「友達」という単語は、今の私にとつて聞きたくない言葉のひとつだっ
た。けどそんなこと知るよしもないおばさんは、続いて今の私が一番
聞きたくない名前までも口にした。

「そういえば、千波ちゃんの友達の……なんて名前の子だったかしら。

うづき？そう、卯月ちゃんね。最近見ないわねえ、小学校のころはよく
千波ちゃんの家遊びに来てたのに。やっぱり中学生にもなると、」

「あの、スイカ、ありがとうございます」

おばさんの言葉を遮さへって、心のこもっていないお礼を早口で言うつと、
私はその場をそそくさと立ち去った。おばさんがまだ何か言っているよ
うな気もしたけれど、少し離れるとそれはセミのさわがしい声の中に溶
けていった。

私、小野千波には、はつきり言って取り柄がない。強いて言うなら眼
鏡が似合うところぐらいだ。成績は良くも悪くもなく、極めて「いい子

ちゃん」ではないけどグレてもいない。つまり、なんでもかんでも中途半端な人間だった。

それに比べて、私の友達……だった人、水前卯月は、完璧を絵にかいたような女の子だ。休み時間中はいつも大勢の女の子の輪の中心で楽しそうにしゃべっていて、男女の区別なく友達が多い。成績優秀、所属している運動部でも期待されているらしいし、快活な性格のため私の知っている限り誰からも好かれた。

彼女と私は幼稚園からの幼なじみで、そのころから何かと天秤にかけられることが多かった。そして天秤はいつも卯月の方に傾いて、私の方に傾くことはおろか、つり合うことも滅多になかった。

しかし最近では天秤にかけられることすらなくなっていて、私は道端の石ころ同然になっている。私はそれが不満だったし、卯月にジェラシーを感じてもいた。なんで卯月だけ……と思ったことは、今まで数えきれないほどある。

それでも私は、そんな一か月に三回は必ず回数が更新されるいやあな気持ちをして、卯月と友達でいた。卯月と友達じゃなくなったら、私の価値が今以上に下がってしまう気がしたからだ。

私に妬ねたまれていたことも知らずに、卯月は土日どっか行こうとか、家に遊びに行ってもいいかとか言って、中学生になっても根気よく私の世話を焼いてくれていた。いくら知らないとはいえず、一緒にいても大して得しない私に卯月が気をかけてくれたのは結局、彼女が優しかったからだろうと思う。

だけど私は、そんな彼女の優しさを、溜まりに溜まったつまらない嫉妬しつと心である日、踏みにじってしまった。

あれは夏休みに入る少し前のこと。

終礼が終わり、がやがやと賑にぎやかな教室の中で、私はリュックに教科書類をつっこんでいた。ほとんどからっぽになった机の中を忘れ物がないかとまさぐると、奥の方にぐしゃぐしゃになった紙つきれを見つけた。……さつき返された数学の小テストだ。紙の右上で波打っている赤い数字を見て、私はまた意気消沈した。

「この間のテストも悪かったしなあ……」

7月はじめごろにした期末テストに思いを馳せる。最近では身のまわりのこと全部がなんとなくくまなくいかなかった。(もとから順風満帆！ってほどでもなかったけど)。そのせいも、もやもやして重いものが胸の中に溜まっているような感じがしてここ数日気分が悪い。教室内の湿った暑さもイライラを募らせて、私はますます仏頂面になった。

小テストのシワを適当にのばして、リュックに放りこむ。そして、さあ帰ろうと荷物を持って廊下に出ると、卯月とばったり会った。

「千波！」

私を見ると、卯月はぱっと顔を輝かせた。悩みごととかとは無縁そうなその笑顔を眺めて、そんな顔のできる卯月を私はまた羨ましく思ってしまった。

卯月と会うのもけっこう久しぶりだったりする。二年生になって、一年生の時は一緒だったクラスが離れ、顔を合わせる機会が減ったからだろう。

「部活は？」

「ないよ」

私がそっけなく答えると、卯月は

「あたしも今日ないんだ。一緒に帰ろう」

と弾んだ声で言った。

生徒玄関に向かって、二人並んで階段を下りている間、ほとんど卯月がひとりでしゃべっていた。私はときどき「うん」とか「へえ」なんて

相槌を打つだけで、ぼーっとしていた。

二階ぐらいいまでやってきた時、上の階から一年生の子が猛ダッシュで下りてきた。その子は卯月の姿が目にも留まると

「水前せんばい、さようならあ」

と私たちの横を通り過ぎる時に言い残していった。

「さよなら」と返事をした卯月に「後輩？」と訊くと、卯月は「うん、

井上つて子なんだけど、熱心でいい子だよ」と答えて、その子について

とかいろいろ部活関係のことを話し始めた。その時の卯月の顔は、私よりずっと年上のおねえさんのものに見えた。

ふいに、おいてきぼりにされた気がして、腹が立った。

私は足を止めた。

「どうしたの？」

卯月も止まる。

「…………卯月は、いいよね」

その言葉が口から漏れると、せき止めてた水が溢れるように、卯月への嫉妬心とか自分への不満とかでできた胸のもやもやが、どンドン言葉

の嫉妬心とか自分への不満とかでできた胸のもやもやが、どンドン言葉

になつて放たれた。

「勉強もできて、部活でも活躍してて。それに比べてなんにもできない私に優しくして、裏で笑ったりしてるんじゃない？」

私の突然の言葉に、卯月は戸惑ったようだった。それでも私を落ち着

かせようと口を開く。

「そんなことするわけないよ、どうしたの？何か悩みごとでもあるの？

あたし、相談にのるよ」

宥めるような卯月の口調に、私は落ち着くどころか更にいきり立った。

「卯月みたいなひとに、私の気持ちなんて分かるわけないよ！」

「卯月みたいなひとに、私の気持ちなんて分かるわけないよ！」

言い捨てて、呆然とした卯月をおきざりにしたまま、私は逃げた。

自分のしたことがただの八つ当たりだつてことを理解するのにそう時間はかからなかった。気付いてしまうと、内履きのまま家まで走ってきたことも、そのせいでお母さんに怒られたことも、夕飯に嫌いな茄子が出ることも、そろそろやつてくる夏休みの予定のことも、なんにも頭に入らなくなってしまった。

あと五日、あと四日、あと三日、あと二日、あと一日。夏休みまでの日数を指折りで数える間、私は卯月に一度も会わなかった。

そして、夏休み。

謝る機会を掴めないまま、今、私はここにいます。

「ただいまーっ」
玄関に倒れこんだ私を、台所から出てきたお母さんが「制服がシワになるでしょ」と叱つて叩いた。あんまりうるさく言われるのもいやだから、私はしぶしぶ歩いて台所に向かった。さっきのスイカをテーブルに置いて、冷蔵庫の麦茶をこきゅつこきゅつと飲むと、お母さんのおこごごとが炸裂する前に早々と二階にある自分の部屋へ退散した。

部屋に入るとまっさきに机の上に放られた宿題のひとつである5教科のワークが目について、私はうんざりした。昨日の夜やろうと思っただけいけどやっぱやる気が出なくてそのままにしていたものだ。夏休みもあと少しだというのに、ワークの中身は白いところの方が多い。

小学生の時から私は宿題をためこむタイプだった。夏休みが残り2週間をきつたところでやつと慌てて本格的に取り組み始めるから、いつもお母さんや卯月のお世話になっていた。中学生になって少しは改善されたかと思つてたけど、相変わらずなようだ。

「どーしよーかなー、今年は」

お母さんは去年から私の宿題についてはノータッチ状態で、手伝つても

お母さんは去年から私の宿題についてはノータッチ状態で、手伝つても

お母さんは去年から私の宿題についてはノータッチ状態で、手伝つても

お母さんは去年から私の宿題についてはノータッチ状態で、手伝つても

お母さんは去年から私の宿題についてはノータッチ状態で、手伝つても

お母さんは去年から私の宿題についてはノータッチ状態で、手伝つても

らうことなんて期待できそうもない。としたら卯月に頼むしか選択肢はないわけなんだけど、あんなひどいことをしてしまった手前、のこのこと卯月の家を訪ねて「宿題教えてー」なんて言えるほど、私の神経は図太くない。だったら別の友達に頼めばいいじゃないかと言う人もいると思うけど、私には友達が少なく、しかもその中で気楽に宿題手伝ってと頼める人は、卯月ぐらいしかいなかった。

「あーあ」

着替え終わってベッドに勢いよく寝転ぶと、天井を見つめる。某猫型ロボットが欲しいと熱烈に思った。ためしに机のひき出しを開けてみようともしつたけど、いくら眼鏡が（某猫型ロボットに泣いてすがりつく眼鏡の男の子ぐらい）似合うからといって彼が私のところに来るはずないので、やめた。

とにかく、猫型ロボットじゃなくてもいいからこの状況を突破できる何か欲しい。そう、卯月との関係も、無駄に過ごしている夏休みも、中途半端な自分も、全部リセットできる道具をください、神さま！

「……なーんて、ね」

天井から何かが光り輝きながら降りてくるわけでもなく。ここにあるのはいつもの、普通すぎる風景だった。

さすがに馬鹿らしくなってきたので、私はお昼ご飯ができていないか見てくるために、部屋を出た。

「おーい、いるかーい」

お昼のそうめんできつぱいってばいの体を引きずって、私は近所の公園に来ていた。

公園には人気がなく、ときどき犬の散歩に来た人が通るだけで、子供の姿なんて私以外見当たらない。私が幼稚園児の時の頃は、もうちょっとと活気があったのになあ……うーん、時代の流れだねえ。……って違う、今はそんなことを感じに来たんじゃない。

「おーい、……あつ、いたいた」

公園内で一番大きな木の下に、一匹の猫がまんじゅうみたいに丸まって寝ていた。私がそばにしゃがんでも、猫は目をほんのちよびつと開けただけで、また^{まぶた}瞼を閉じる。

私はその猫の目の前に、手に持っていた皿をぼん、と差し出した。今日ここに来たのはこのためだ。その途端、猫はクワツと目を開けて起き上がると、皿の中身である焼き鮭をががつと食べ始めた。

「もーちよつと味わって食べなよ」

皿の中から急激に鮭が消えていくのを見て、私は言った。野良猫だから仕方ないのかもしれないけど。

この猫がここに住み着いたのは私が中一の時から。つまり一年はずっとここにいることになる。多分散歩がてらのおじいさんおばあさんが毎日のようにエサをくれて食べ物に困りそうもないし、人通りが少なく静かだから住みやすかったんだろう。ちなみに私がこいつにこうやって夕飯の残りとかをあげるようになったのはつい最近で、それまではこの公園に猫がいることさえ知らなかった。

「いいなあ、猫は」

まっピンクな口の中を堂々と見せつけながら^{あくび}欠伸をしている猫に向かっ

て^{つが}呟く。「このごろいやなこと続きの私としては、^{のんき}呑気な猫の生活が羨

ましいことこの上ない。

「ねえ、猫になったらいやなこと全部、なくなるかな」

話しかけてみても、猫は「なあーう」としか答えなかった。私はため息をついて、猫の黒っぽい背中をなでた。

家に帰ると、お母さんに「サチちゃんから本もらったわよ。あんたの

部屋に置いてあるからね」と言われた。サチちゃんとは、お母さんの実家に住んでいる私の従姉だ。あまり会ったことはないんだけど、私が読書好きだと知ると、たびたび自分が読み終わった本を家に送ってくれるようになった。……そのほとんどが恋愛小説で、私はそういうジャンルが苦手だったから、今まで彼女からもらった本はすべて一階の押し入れにこっそりしまっている。

部屋の机の上には確かに、どでかいダンボールが置いてあった。

「……………」

すぐに押し入れに持つていくのもアレなので、数日はどこか邪魔にならないところに置いておくことにした。

部屋の隅すみの方に空き場所を見つけたので、そこにダンボールをドサツと置く。

と、その時。

『だれか……………』

声が出た。

かすかにしか聞こえなかったから、はじめは空耳かと思った。けれど、

『だーれーかー！ここから出してえー！』

もう一度、今度はさつきよりも大きな声が部屋に響いて、さすがに私は腰を抜かした。

聞き慣れない声、自分以外には誰もいない部屋。私の部屋にはテレビなんてないし、一階のテレビの音量も控え目にしてあるから、私の部屋まで聞こえるはずない。ということとは……………！

「ゆっ、ユレーイ……………？」

私は急いで一時退却を試みた。

『……………ちよつと、そのキミ』

「はいっ!？」

ドアノブに手をかけたところで謎の声がトーンを落として話しかけてきたために、私はその姿勢のまま固まる。

『その椅子に座って』

「は、はい……………」

『い・い・か・らっ!』

なんとなく従って、私は机のそばの、学校のパソコン室とかによくある椅子に座った。

『キミねー、人が出してよー、って助けを求めているのに逃げたらダメでしょ?』

「だ、だつて……………」

『言い訳しないっ!』

「う、うわ、ごめんなさい」

『キミみたいな子には、直截ちよくせきにものを言わないといけないみたいだね。……………こほん、さあ、ボクを探しておくれ!』

「どこにいるの?」

『……………自分で探せっ!』

得体の知れないものを探すというのはなかなか気持ちが悪かったけど、そのままにしとくのはもつと気持ちが悪いので、私は仕方なく声の持ち主を探すことにした。

さつき話していた時に声はおそらく部屋の隅すみ、……………サチちゃんからの本が入ったダンボールの中からしていたようなので、私はダンボールの中身を全部出した。

するとドンピシャリ、本の他に、丸い……………何か機械のようなものを見つけた。全体は銀色のメタルボディで、手の平に収まるくらい大きさだけど、ずっしりと重い。

「何この異物……」

『失敬な！……まあ、ちゃんとボクのこと見つけられたし、よしとしよう』

どうやら謎の声の主はこの機械らしい。なるほど、よく聴いたらちよつと金属的な声かもしれない。私は訊いた。

「あなた、なんなの？」

機械は答えた。

『キミの、救世主さ』

『ボクはルント』と機械は言った。

「わ、私は……」私が名乗ろうとすると、ルントに遮さえぎられた。

『大丈夫、キミの名前ならもう知ってるよ、チナミ。名前だけじゃなくって、どんな学校に通ってるかとか、好きな食べもの、嫌いな食べものは何かとかも……』

「うそ」

『キミの代わりに自己紹介もできるよ。オノ、チナミ。はっきり言っ取り柄がない女の子。強いて言うなら眼鏡が似合うところだけ。成績は良くも悪くもなく、極めて「いい子ちゃん」ではないけどグレてもいない。つまり、』

「あーっ！もういいっ、いいってば！じゅうぶんっ！……なんでそんなこと知ってるの」

私がじろりと睨にらんでも、ルントは悪びれもせず『ボクは魔法のアイテムだからね』と言った。『人の子ひとりの情報なんて、見ただけで把握できてしまうよ』

「魔法のアイテムうー？」

『あつ、何さ、その胡散臭うさんそうな顔！なんなら使ってみるか？』

「……何ができるの？」

『時空をとびこえること、さ』

私は目を見張った。

「それって……タイムマシン、ってこと？」

『まあ、そういうことになるかな』

「すつ、すごい！私、やりたいことがあるんだけどっ」

私は手の中のルントにかじりつく勢いで叫んだ。

『キミならそう言うと思ったよ。いいとも、ボクはそのために来たんだから』

しかしそこで、私ははたと気付いた。

「ちよおおおと、まってよ。私はどこに乗ればいいの？」

『乗る？……あー、大丈夫、ボクってばハイテクだから、目をつぶってボクを握ってれば十分だよ。乗る必要なっしんぐ！』

「あ、あやしすぎる……」

『もののためしだつて！それにキミ、やりたいことがあるんでしょ？いの？』

「………わかった、やる」

私は意を決してそう答えた。

かくして、私はこのヘンテコタイムマシンと一緒に、しばしの時間旅行をすることになった。

『行き先は……先月の十六日、の四時半ごろ。友達とケンカしたつていうか友達に八つ当たりするちよつと前の時間、で、あつてるよね？』

「ぐっ……そーですよー」

『いったい何するのさ？』

知ってるくせに、と思いいながらも私は返事してあげた。

「未来を……今を、変える」

目を、開けた。

「……………あ」

賑やかな教室。目の前のリュック。

『ね、言った通りでしょ』

握った手の平の中で、ルントが笑う。

机の中を、ルントを握ってない方の手でまさぐると、……………あった。ぐしゃぐしゃになった小テスト。

「間違いない……………」

私は、過去に来たんだ！

『そうだチナミ。ここにいれるのは一時間だけだからね、急いでよ』

「それだけあれば、十分」

そう言いながら教室を出ると、やっぱり卯月と会った。

「千波！」

あの時と少しも変わらない笑顔。

「部活は？」

「ないよ」

「あたしも今日ないんだ。一緒に帰ろう」

階段を下りて、生徒玄関に向かう。卯月はあの時とまったく同じ話を、同じ調子で話していた。

そして二階ぐらいまでやってくると、一年生の子が猛ダッシュで下りてきて、卯月とあいさつを交わした。

「後輩？」と訊くと思った通り卯月は「うん、井上って子なんだけど……………」としゃべり始めた。相変わらず卯月がおねえさんに見えて、おいてきぼりにされた気にもなったけど、私は玄関に着くまでずっと黙っていた。

自分と反対方向の通学路を辿って帰る卯月の背中を見送って、私はルントに言った。

「よし、用は済んだよ。帰ろう」

『はいよ』

私はまた目をつぶった。

ルントとの時間旅行を終えた翌日の夕方、卯月から電話がかかってきた。

『やつほー、千波』

受話器から聞こえる卯月の声は明るい。

「ひ、久しぶりだねえ」

『？なーに言ってるんの、三日前に会ったばかりでしょー？』

「そ、そうだったかな」

『やだ、千波、もしかしてボケてきた？……………それはともかく、明日ヒマ？』

「う、うん」

『一緒にプール行こ、プール！お昼食べてから！』

「う、うん」

『やったーっ！じゃ、用はそれだけだから』

「あ、卯月……………」

『なに？』

私は恐る恐る言葉を口にした。

「怒って……………ない？」

『え？』

「千波サイテー！とか、思っていない？」

『なんであたしがそんなこと思うの？』

私はしばらくの間そう言うことをしつこく訊いて、しまいには卯月に

『大丈夫？頭打ったの？』なんて言われてしまった。

「な、なんでもないよ……じゃ、明日」
『うん、じゃあね』

そして、電話は切れた。

どうやら、過去を変えたことで今の私たちは、夏休み中数回会って、私は卯月に八つ当たりしてないことになって、卯月も怒ってなくて、しかも明日会えることになったらしい。

「こんなに簡単に、仲直りできるなんて……。ルント、ありがとう」ズボンのポケットに入っているルントに向かって私はそう言った。返事はなかったけど、その日の夜は安心してぐっすり眠れた。

それからというものの、私の日々は薔薇色に輝いていたと言っても過言じゃなかった。

何をやっても怖くなかった。もしも失敗したらルントに過去に連れていってもらってやり直せばよかったからだ。時にはこの間おばさんにもらったすいかをもう一度食べたいからスイカを食べる前の時間に戻るといった阿呆なことをやりながら、夏休みを楽しく過ごした。

だけどもある日は、重大なことに気付いてしまった。

その日は、夏休み前にもらったあのぐしやぐしやの小テストを、しっかり勉強してからもう一度受けてきた。

現在に戻ると、私はすぐさまルントを机の上に置いてリュックの中を覗いた。返ってきた数学の小テストは、夏休み前のあの時から少しも動かされずにそこにあった。相変わらずぐしやぐしやだが、紙の右上の波打つ数字は前よりも二十点上がっていた。

私は満足気な顔をして、返ってきたテスト類とかをいつもまとめて入

れてあるファイルにそのテストを入れようとした。

ぴた、と手が止まる。

そのファイルの中に入っているテストの先頭は、今入れようとしている小テストよりかなり前に返ってきた社会の小テストだった。他の教科と比べると、社会は割と私の得意科目だから、そのテストもけっこういい点数だったのに、右上に赤く書かれている数字は前見た時よりも、……二十点も下がっていた。

「……………」

ふたつのテストを見比べて疑問符を浮かべる私を見て、ルントは『気付いちやったかあ』

と呟いて、説明し始めた。

『世の中で起こることすべてには、意味があるんだ。ひとつでも欠けたら世の理が崩れてしまう。だから、一度起こったことを「なかったこと」にするのは、ボクの手力だけでは不可能だ』

「でも……………」

『今までキミがボクを使ってやってきたことは、「起こるべきことを先延ばしにする」ことだ。つまり、キミが「なかったこと」になったと思ってること全部、これからの未来に必ず現れる。ま、この場合過去に出たみただけだね』

「じゃあ、卯月とのことも……………」

『うん』

私は愕然として、その場に座りこんでしまった。

どこでもいいから逃げたくて、私は外に飛び出した。ふらふらとあてもなく歩いて、気付くと公園に来ていた。何もすることがなかったから、私は特に深い意味もなくあの猫を探した。

「おーい、ねーこー」

猫はいつもの木の下にいなかった。あちこち探し回って、がさつとかき分けた茂みの中でやっと見つけた。

足も手も投げ出して力無く横になっている猫を見て、私は何かいやなものを感じた。顔を覗くと、鮮やかな黄色い目と目があつた。今まで見たこともないくらいに大きく見開かれたそれにぎよつとして、急いで猫の体に手を置く。……いつもは手が上下に動くのに、今日はぴくりともしない。

心臓が……止まってるのか。

はじめのうちは柔らかかった猫の体が、どんどん熱を失って固くなっていく。何か言わなくちゃ、呼びかけてあげなくちゃと思うのに、口から出たのはひゅつという虚しい空気むなの音だけだった。

そして私は半ば転がるようにして、またその場を逃げ出した。

あの猫はうちの猫じゃないし、名前もつけていなかった。エサもときどきあげるだけで、しかもそんなに長い時間一緒にいたわけじゃない。

では何故こんなに悲しいのか。

こんなに悲しいなら、はじめから会わなければよかった。ルントに頼もうかと思っただけ、そんなことしても無駄だというのは、よく分かっていた。

翌日、さすがにいたたまれなくなつて、私はもう一度公園にやって来た。しかし茂みの中にもどこにも、猫の姿は見当たらない。きよろきよろしていると、うしろから声をかけられた。

「猫をお探しですか」

振り向くと、犬を連れのおじいさんがそこにいた。ここでも何回か見かけたことがある。

「あ、あの……猫は？」

私が訊くと、あの猫は大勢の動物をひとつのお墓で供養してくれるところに連れて行ったよとおじいさんは話してくれた。

「私が見つけた時には、もう体がごちごちになつてしまつていてね、私じゃ目をつぶらせてあげることもできなかったよ」

私は猫の黄色い目を思い出して堪らたまなくなり、こう言った。

「あのつ……多分私が最初にあの子を見つけたんです。その時はまだ体も柔らかかったから……つ、ごめんなさい、ほんとは私がお墓を用意してあげなくちゃいけなかったのに」

泣きそうな私をしばらく見つめ、おじいさんは一枚の小さな紙を私に差し出した。

「はい、お墓の場所のメモです。ここに行つてお参りしてくるだけで十分だと思いますよ」

受け取つたメモをじつと見て、私は眩くらいた。

「……なんで、動物の命って短いんでしょうか」

「……私にも、分かりません。でも、短い命だからこそ、やり直しのきかない命だからこそ、私たちは動物を可愛がるんでしょうね」

おじいさんの言葉は、ずしんと私の胸に響いた。

「わんちゃん、可愛いですね。名前は？」

「タローですよ。なでみまですか？」

私は柴犬のタローの頭をそつとなでた。

「あつたかい……」

ぽとと涙がひとしずく砂の地面に落ちたけれど、その跡は、夏の暑さですぐに消えた。

今すぐ卯月のところへ行って謝らないといけない気がして、私は卯月

の家を目指して走った。

でも、いざとなったら明確な場所が分からなくて、私はいつの間にか見たことのない景色の中に立っていた。

そばの標識を見ると、聞いたところはあるけれど一度も来たことのない町の名前が小さく書いてあった。当然卯月の家は見当たらない。

卯月の家にはこれまで何回も連れてきてもらったことがあるのに、ひとりじゃ家のある町にもいけない。

私は立ち止った。

そういえば私は、卯月のことを真剣に知ろうとしたことがなかったかもしれない。この町のことと同じように、うわべだけしか知らなかった。見なかった。

卯月に限らず、私はいろんな人のことを知ろうとしていなかった。スイカをくれたお婆さんのことも、柴犬のタローのことも、その飼い主のおじいさんのことも。

こうやって、会いたくても会えないときがくるかもしれないのに。

ふと上を見ると、燃える赤の空が見えた。きれいだった。明日になれば、ううん、この一瞬が過ぎれば、もうこれと同じ空はもう二度と見れないんだろう。でもだからこそ綺麗だと思う。だからこそ生きたいと思う。

私はズボンのポケットに右手をつっこみ、ルントを取り出した。そしてその手を、大きく振り上げる。ルントの声が耳に響く。

『ボクを壊したら、ボクと出会う前の状態に逆戻りだよ。友達と仲直りできるかどうかも分からないし、あの猫も戻ってこないんだよ』

「いいよ、……自分のやったことには、責任をもたなくちゃ」

『……じゃ、好きにすれば』

私はルントを勢いよく、アスファルトの地面に叩きつけた。

かしゅん、あつけない音をたてて、銀色の破片が飛び散ったと思うと、私の視界は一瞬暗転して、私は目をつぶった。次に目を開けたときには、

ルントの破片はあとかたもなく消えていた。

私の背中にうすい蒼の闇が迫る。
家までの帰り道は、ちよつと長くて大変だった。

ルントの言った通り、私の日々は、ルントと出会う前の状態に戻っていて、時間だけが過ぎていた。……出会う前の状態に戻ったと言っても、公園の猫は生き返ったりしなかったけど。

とりあえず私は、再び白いところだらけになったワークをやる前に、卯月に電話することにした。

『はい、もしもし水前です。』
『はい、もしもし卯月が出て、私はどぎまぎしてしまった。それでもなんとか乗ると、』

『千波？なんか用？』

と割と普通に対応してくれた。

「あ、あの……」

『……』

「タイムマシンがあったら卯月、どうする？」

本当に言いたい言葉を押し退けて、こんな突飛な問いが放たれた。緊張しているせいだと心の中で言い訳してみる。

それなのに卯月は

『そーだなー』

と真面目に答え始めた。

『悪い点だったテストを良い点とれるよーに勉強してからやり直したり、おいしいものを食べた後に過去に戻ってもう一回食べたり、とか？』

「ぶっ」

『む、笑ったな！』

「だって卯月がそんなこと……ぶぶぶぶ」

『失礼だな、あたしだって普通の人間なの！私より勉強できる子は山ほ

どいるし、部活でもうまい子はたつくさんいるんだから！」

「あはははは！」

笑いながら、私は思った。私も卯月も、大して変わらない。誰にでも悩みはあるんだ。

「あのね、卯月………」

『ん？』

ずっと喉につつかえていた言葉を、つぶや呟く。

「ごめんね。………ありがとう」

『なーに言ってるの、あたしが千波と一緒にいたいだけだよ』

「……うん、私も」

損とか得とかそんなこと、関係ない。

『あつ、そーだ。今から千波の家行ってもいい？』

「いいけど………なんで？」

『まだ宿題終わってないでしょ？手伝ってあげるよ』

図星をつかれて、私は赤面した。

私、小野千波には、はつきり言って取り柄がない。強いて言うなら眼鏡が似合うところぐらいだ。成績は良くも悪くもなく、極めて「いい子ちゃん」ではないけどグレでもない。つまり、なんでもかんでも中途半端な人間だ。しかもいやなことから逃げたいと思うクセもある。

だけどこの夏、いろんなことを身をもって体験してみ、私は思った。取り柄がなくなつて、コンプレックスだらけだって、「今」を力いっぱい生きてやろうと。そしてそれがいつしか取り柄になるのだろうと今のところの私はそう、信じている。

「あつい」

今年の夏何回こう言っただろう………と思いつながら、私は呟いた。つぶや

朝からセミはさわがしく、それでも夏休みが始まったころよりは声も小さくなっていた。……暑さは衰えないようだけど。

「あーあ、夏休み終わつちやつたなあ」

つまりは今日から二期ということ。学校に行くようになると、ルントがいればなあ………と思う頻度は更に増えるだろう。でも、ああしたこと、不思議と後悔はしていなかった。

ふと前を見ると、前にスイカをくれたおばさんが、また畑仕事をしてた。長話をご遠慮したので、避けて通ろうとした………けど。

(そういえばまだ「スイカおいしかった」ってこと、伝えてないなあ)それは、今伝えなくてもいい言葉。でも、いつか伝えられなくなるかもしれない言葉でもあった。
(………よし！)

私は力強く一步を踏み出すと、おばさんの方へ、今伝えたい言葉を携えたずきて、向かった。おしまい

《選評》

できすぎる友人を持ち、日々コンプレックスにさいなまれてる主人公が、ある日突然現れたロボット型タイムマシンに出会い、少しずつ成長していくストーリーです。

全体の構成がしっかりしており、表現技法など非常に勉強していると
思われる点が多く見受けられ、作者の熱意や意欲が感じられる作品です。